

【フィールドからデスクから】

か が け もんじょ

「加賀家文書」について

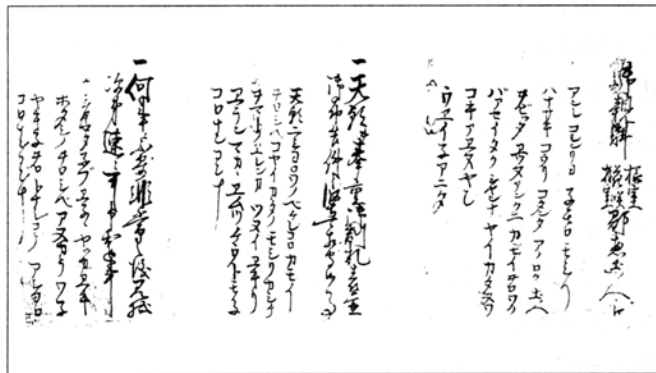
4月から非常勤として当センターのスタッフに加わり、早くも5ヶ月が過ぎた。私自身アイヌ語を専門とし、古いアイヌ語資料にこれまでも多少かわって来たことから、この機会を利用して「加賀家文書」の整理を計画してみることにした。

* * *

「加賀家文書」は、秋田屋加賀伝蔵（1804-1874）の残した文書で、原本は秋田県八森町加賀実留男氏所蔵である（秋葉實『北方史史料集成』第二巻、加賀家文書、札幌：北海道出版企画センター、1989、iii）。秋葉氏によれば、伝蔵は、まずクスリ場所で飯炊きとして勤め、メンカクシ、ムンケケ等からアイヌ語を習得し、後に子モロ場所、シベツ場所に通辞として勤めたという。（なお、伝蔵にふれた研究としては、佐々木利和、「蝦夷通詞について」、『民族接触』、東京：六興出版、1989、がある。）

複写には北海道立図書館所蔵のマイクロフィルム（2411枚、秋葉〔同上、iv〕による）があり、北海道大学文学部言語学研究室には主としてアイヌ語関係文書のみを撮影したマイクロフィルム（1332コマ、池上二良、浅井亨氏撮影）もある（なお、北大所蔵のフィルムはこの度、当センターがCD-ROM化（計3枚）して収蔵し、資料の保存、利用の便が計られた）。量の多さ、信頼性において、アイヌ語研究上極めて重要な意義を持つものであることは言うまでもない。しかし、全文の翻刻は既に秋葉（同上）の労作（道立図書館フィルムによる）があるものの、アイヌ語部分の多くは割愛されている。アイヌ語部分の翻刻、研究としては、加賀康三「〔おきつ清三こい戀の夜嵐〕に就いて」（『蝦夷往来』第8号、札幌：尚古堂、1932.）浅井亨「加賀屋文書の中のチャコルベ」（『北方文化研究』第6号、札幌：北海道大学文

学部、1973.）があるとはいえ、内容の分析はまだまだ全体のごく一部にとどまっていると言ってよいであろう。



〔写真 1〕

ところで、アイヌ語研究において、なぜ加賀家文書のような古文書の研究が必要なのだろうか。

すべての言語は時間と共に変化する。言語研究において言語史の解明は不可欠である。アイヌ語も例外ではない。しかし、アイヌ語を記した最古の文献は、せいぜい17世紀初めに遡るに過ぎず、それ以前のアイヌ語の古い姿を直接知る手だてはない。そこで重要となって来るのがアイヌ語の方言である。方言というのは、一口で言えば同じ言語の変種である。その変種を相互に比較することによって分裂前の古い姿を推定する方法（比較方法）があり、方言の地理的分布から古い形式と新しい形式を推定する分野（言語地理学）もある。これらの手法によって古いアイヌ語の姿を推定できる可能性がある。加賀家文書に記されたアイヌ語は、伝蔵が主として活躍したと思われる根室地方のアイヌ語方言を反映したものである可能性があるが、道東地方のアイヌ語方言の資料自体が少ない上に、根室地方のアイヌ語の記録に至っては、豊原熙司・川上淳・本田克代、「根室地方で採録されたアイヌ語 — 明治時代以後」（『根室市博物館開設準備室紀要』第10号、根室：同準備室、1996.）佐藤正彦・本田克代、「根室地方で採録されたアイヌ語 — 文久二年」（『根室市博物館開

設準備室紀要』第12号、根室：同準備室、1998.）の中で紹介された資料はあるものの、極めて僅かであり、方言資料として加賀家文書の持つ意味は極めて大きいと言わなければならない。いくつか気の付いた点をあげてみよう。例えば「御親料 根室花咲根室郡惣土人江」と題された文書〔写真1〕（北大フィルムによる。なお、秋葉（同上）106には「御親叫」と翻刻）中のバアセ pase 「重い」のような形は、第一音節が長く発音されたことを示しているが、これはアクセントの対立の存在を窺わせるものである（母音の長短の対立の可能性はしばらく置く）。釧路方言にはアクセントの対立がないとの報告（服部四郎・知里真志保、「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」、『民族学研究』第24巻4号、東京：日本民族学協会、1960.）と比較すると興味深い。また、アヌカラが二例あり、a-nukar「我々が、一般に人が、見る」に相当するものであろうが、a-という形式に相当する形式は、春採、美幌、網走のような他の道東地方の資料では an-である（佐藤知己、『蝦夷言いろは引の研究』、札幌：北海道大学文学部、1995.）。文書全体の分析を待たなければ確実なことは言えないのは勿論だが、これらはいずれも沙流方言のような北海道南西方言と共通の特徴を示しているように見える。根室方言がもしそのような特徴を持っていたとすれば、他の道東方言と共通の特徴を持っていたらという一般的予測に反することになり、東西両アイヌ語方言の違いがどのようにしてできたか、というアイヌ語学上の大問題の行方にも大きな影響を与える可能性がある（もしそうでないとすれば、今度は加賀家文書全体の性格を考え直す必要が出てくるだろう。）。ここで、「沙流方言の話者がたまたま漁場にいたのではないか。伝蔵は彼らに申し渡したのである」などと有益な歴史学的推論を下すのも結構だが、この問題の解決のためには、むしろ、加賀家文書以外の、信頼のおける資料を探して、相互比較をする努力をするほうが生産的であろう。もっとも、従来の学問の枠組みからはずれるので、業績にならないせいか、そのよう

な試みが少ないようにみえるのは残念である。

* * *

この機会を利用して、他分野の専門家と協力しつつ、微力ながら加賀家文書中のアイヌ語資料の分析を少しずつ進めて行ければ、と考えている。

佐藤 知己（研究課・非常勤研究職員）

【センターの資料整理から】

山田秀三文庫の整理作業 その5

当センターが寄贈を受けた、アイヌ語地名研究の第一人者・故山田秀三氏の旧蔵資料である山田秀三文庫については、これまでに図書資料、音声・映像資料の目録を発行し、現在、各種の文書等の資料を整理する作業にとりかかっているところです。

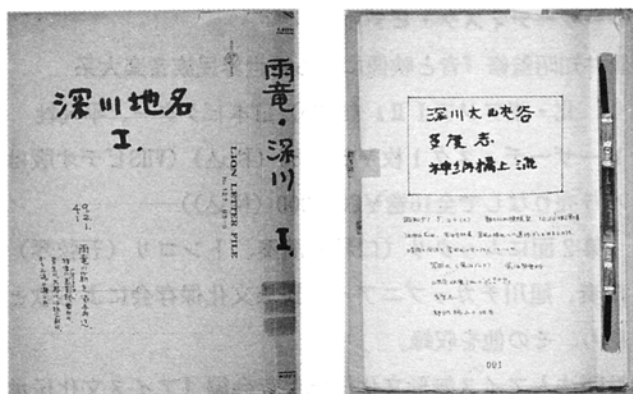
資料のあらましについては、『センターだより』誌上でお知らせしてまいりましたが、現在作業中の資料は、分量も多く、内容、形態ともに多岐にわたるため、資料をいったん「文書」「地図」「写真」「その他」と区分し、山田氏の業績の体系や資料相互の関連を意識しつつ、順次整理し目録化する計画を立てました。今年度はこれらの中でも保存措置を急ぐ必要の高い地名調査記録のファイル類を中心とした資料の整理・保存と目録化等の作業を行っています。

* * *

山田氏の地名研究の特徴として、昔の記録や地図等も駆使した文献学的な検討を徹底して行い、その上で現地を調査し、これらを通じて得た知見を総合しながら考察を加えていく、ということが指摘されています。現在整理しているファイル類もまた、このような氏の地名研究の特徴をよく示していると考えられるものを多く含んでいます。

ファイルはB5判またはA5判で、市販のフラットファイルなどを使用しています。表や背に「積丹」「東日高」「秋田」など地域名を記し、中に綴じ

た用紙（400字詰原稿用紙等を使用）には、現地を調査した行程にそって、調査結果や文献の記録などが書き込まれたり現地の地図、写真などが貼付されたりしています〔写真①②〕。調査した地域の国土地理院図などが挟まれていることも多く、そこにも古い文献から地名を転記したり、現地を実際に見て得た情報などを書き込んだりしています。用紙に貼付した地図にはトレーシングペーパーに各種の地図を筆写したものが多く見られます。これらの書き込みや筆写にも、文献や地図ごとに色を使い分けて地形や地名の変化を示すなどの工夫が見られます。現地で写真を撮影した位置とその方角を書き込んであることも多く、行程の記録も詳細です。



〔写真①②：ファイルの表紙と内部〕

氏の記録は、先々の風景や出会った人々のこと、あるいは行き帰りに食べて美味しかったものに触れていることもあります。文章には全体を通して肩肘ばったところや堅苦しさを感ぜさせない魅力があります。氏が生前、ご自身の地名研究を「道楽」とおっしゃっていた一面がこんなところに表れているのだろうな、と思います。

そしてファイルをよく見ると、氏の「道楽」のもう一つの面は学問に厳密であり誠実であったことだと改めて思い知らされます。

貼付された地図には、同じ場所について江戸時代から「現在」までの何点かの地図を並べたり重ねたりして、地形や地名の変化を示すような工夫も見られます。川の写真を貼った横に、昔の水量を推測し地形を想像するメモを添えている点には、氏の注意

力と観察力を感ぜさせられます。その場所の地名のみで解釈を急がずに、同じような地形や地名と比較検討している記述も多く、また地形等に関する単語の検討からは、専門的なアイヌ語の知識がうかがえます。何より、自分の見解には「山田私見」と付記してその旨を示したり、「～であろう」「～だろうか」「何ともわからない」等と、自分の中での確かさの度合いを表明しておられる点に、氏の姿勢を感じます。

* * *

綴じ込まれた用紙には様々なものを糊やテープで貼付してあるうえ、綴じ具は金属ですから、このままの状態だと資料は傷んでしまいます。カラー写真の焼き付けが多く貼付されており、古いものでは既に色はかなり変化しています。ファイルの内容は、他の地図や文献からの引用を含んだり、他のファイルや資料との間で幾重にも引用、転記、合綴が行われていたりしています。資料の元の状態を保ちつつ、こうした資料の連関を意識した整理が必要です。調査に同行された方々や調査先で出会った方々の写真等の情報を含んでいる箇所もあり、プライバシー等に関する部分の取り扱いにも注意する必要があります。氏は生前、このファイルのことをあまり公にしておられなかったようで、それだけに大切に取扱わねばならない資料なのだと思います。



〔写真③：フォトCD〕

そこで、資料は1点ごとに目録をとるほか、ファイルなどは各ページごとの内容を確認して目次を作成し、データベースに入力しています。プライバシー等に関する情報を含む箇所もデータベース上で

チェックできるようにしました。資料の保存措置と並行して、資料の現状を記録することと将来の閲覧などに備えることを目的に、写真撮影による複製を作成することにしました。多くの色を使い分けた資料なのでカラーフィルムを使用し、さらにこれをフォトCDと呼ばれるCD（コンパクトディスク）に入力しています〔写真③〕。こうすることで、将来的にはパソコンの画面上で画像を閲覧したり、画像をデータベースで管理することが可能になると考えています。

* * *

資料は1万点以上あり、内容の確認、複製の作成などには相当の時間を要します。フォトCD作成の完了にもさらに数年を要する予定ですが、このファイル類については今年度末を目処に目録の編集作業を進めております。

小川 正人（研究課・研究職員）

問い合わせあれこれ(2)

アイヌの歌や踊りの視聴覚資料

「アイヌの音楽を聞いてみたいのですが、テープやCDなどは出ていますか？」といった問い合わせが、よく当センターに寄せられます。

多くの場合、現代の個人の創作・編曲を除く、伝統的な歌謡や旋律の付く口頭文芸などを収めたものについてお尋ねですので、回答の際にはそうした曲種を収めたものからお伝えしています。

今回はその中から、一般に普及しているテープやディスクの形で公刊されていて、現在も入手可能なものを抜粋してご紹介します。

<CD>

- ①日本の民族音楽『日本のハーモニー』（1991）キングレコード KICH 2021 ¥2,718（税抜）
ウポポ（座り歌）など3曲を収録。

- ②日本の民族音楽『楽器玉手箱』（1991）キングレコード KICH 2030 ¥2,718（税抜）
ムックリ（口琴）やトンコリ（五弦琴）による3曲を収録。

- ③『蘇るユカラ萱野茂（語り）』（1997）キングレコード KICC 5217 ¥2,427（税抜）

<カセットテープ>

- ④札幌学院大学人文学部編『カムイノミ、カムイユカラ、ユカラ』（1990）札幌学院大学生活共同組合（011-386-2970）¥1,300（税抜）
同編『アイヌ文化に学ぶ』（1990）という本の巻末に掲載されている口頭文芸等の音源を収録・別売りしているもの。

<レーザーディスク・ビデオ>

- ⑤藤井知昭監修『音と映像による新世界民族音楽大系
1. 北・東アジアⅠⅡ』（1995）日本ビクター、平凡社
レーザーディスク1枚¥25,486（税込）（VHSビデオ版はバラ売りなしで全16巻¥200,000（税込））
第2面にムックリ（口琴）演奏、トンコリ（五弦琴）演奏、旭川チカップニアイヌ民族文化保存会による歌と踊り、その他を収録。
- ⑥財団法人アイヌ無形文化伝承保存会編『アイヌ文化伝承記録ビデオ大全集』（1976～）財団法人アイヌ無形文化伝承保存会（011-221-0019）各シリーズ（全4巻または5巻）ごとの有償頒布（公的関係機関のみ対象）
各種シリーズ・巻のうち音楽や舞踊に関するものに「鶴川・アイヌの神事と踊り」「十勝川・アイヌのうたと踊り」「彫る・編む・奏でる」などがある。

<本とセットになっているもの>

- ⑦日本伝統音楽芸能研究会編『邦楽百科入門シリーズカセットブックⅠ 日本の音 声の音楽 1』
⑧同編『同Ⅲ 日本の音 声の音楽 3』
⑨同編『同Ⅳ 日本の音 楽器の音楽』（1988）音楽之友社 各¥7,160（税抜）
⑦～⑨はCDブック版（各¥7,500（税抜））もある。⑦には英雄詞曲の一部、⑧には子守歌、⑨にはムフクン（口琴）演奏を、それぞれ1曲ずつ収録。
- ⑩中川裕監修・片山龍峯編『カムイユカラ』（1996）片山言

語文化研究所（東京都武蔵野市吉祥寺東町2-43-11）

¥6,800

本・解説書・カセットテープ（CD版もある）のセット。神謡を6曲収録。

⑪萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』1～10（1998）ビクターエンタテインメント、平凡社 ¥189,000（税込）
本が全10巻・CD全11枚・VHSビデオ1巻のセット。口頭文芸や歌謡など多数収録。

以上の他にも、現在では絶版になっているものや、図書館など特定の機関でのみ視聴できる資料などがあり、お問い合わせの内容によって随時お知らせしています。それらについては、機会を改めてご紹介する予定です。

甲地 利恵（研究課・研究職員）

「センターだより」1号～10号の総目次

当センターでは1994（平成6年）の開設時から毎年2回広報誌を発行してきました。既刊の1号～10号の主な内容を紹介します（なお、執筆者の職名等は当時のものです）。

1号：1994年10月31日発行

- ・ごあいさつーアイヌ民族文化研究センター広報誌創刊によせて（北海道知事・横路孝弘）
- ・広報誌創刊にあたって（所長・深澤信夫）
- ・施設紹介
- ・研究事業について
- ・センター主催第1回アイヌ文化講演会
- ・山田秀三文庫について
- ・フィールドだより〈コタン オロワ クヌ〉（研究職員・大谷洋一）

2号：1995年3月31日発行

- ・山田秀三文庫の整理作業《図書資料と写真資料》（研究職員・小川正人、研究課長・古原敏弘）
- ・クキマテク〈私はあせった〉（研究職員・大谷洋一）
- ・『シコッタ ウエピリカレ』に参加して（非常勤研究職員

・米田優子）

- ・「イトoppa」〈男が受け継ぐ先祖代々の印〉（研究課・澤井春美）

・1994年度の主な動きとお知らせ

3号：1995年10月1日発行

- ・山田秀三文庫の整理作業その2《映像資料、写真資料、音声資料》（研究職員・甲地利恵、研究課長・古原敏弘、研究職員・大谷洋一）
- ・アイヌ文化紹介小冊子刊行のお知らせ
- ・1995年度前半の動きと今後の予定
- ・ネコン アイセ〈何と呼ぼうか〉（非常勤研究職員・奥田統己）
- ・ネシコイナウ〈クルミの木のイナウ〉（研究職員・貝澤太一）

・センター刊行物についてのお知らせ

4号：1996年3月20日発行

- ・所長就任にあたって（所長・谷本一之）
- ・サンクトペテルスブルグのアイヌ資料調査（研究課長・古原敏弘）
- ・シウリとシウニ（研究職員・貝澤太一）
- ・ケラアン〈おいしい〉（研究職員・大谷洋一）
- ・1995年度後半の動きと今年度のセンター刊行物について

5号：1996年9月30日発行

- ・バラートシ・アイヌコレクション展ーヨーロッパからの里帰りー
- ・山田秀三文庫の整理作業その3（研究職員・甲地利恵）
- ・噂をすれば…（研究職員・澤井春美）
- ・1996年度前半の主な動きと今年度のセンター刊行物の予定

6号：1997年3月31日発行

- ・サンクトペテルスブルグのアイヌ資料調査2（研究課長・古原敏弘）
- ・バラートシ・アイヌコレクション展開催
- ・山田秀三文庫の整理作業追記（研究職員・甲地利恵）
- ・ピパ〈カワシンジュガイ〉（非常勤研究職員・本田優子）
- ・1996年度後半の主な動きと刊行物についてのお知らせ

7号：1997年9月30日発行

- ・久保寺逸彦文庫について（研究職員・小川正人）

- ・山田秀三文庫の整理作業その4（研究職員・小川正人）
- ・ヤイサマ クヌヒ〈ヤイサマを聞いた時〉（研究職員・大谷洋一）
- ・ふつうの人のふつうの文化（非常勤研究職員・奥田統己）

・1997年度前半の動きと刊行物についての予定

8号：1998年3月31日発行

- ・久保寺逸彦文庫の映像資料（研究職員・大谷洋一）
- ・幕別町蝦夷文化考古館文書資料の調査を終えて（研究職員・小川正人）
- ・アイヌ語に取り組む（登別アイヌ語教室講師・上武和臣）
- ・いくつもの虹（研究職員・澤井春美）
- ・1997年度後半の動きと刊行物のお知らせ

9号：1998年9月30日発行

- ・サントペテルブルグのアイヌ資料調査3（研究課長・古原敏弘）
- ・久保寺逸彦文庫図書資料の整理作業（研究職員・小川正人、貝澤太一）
- ・アイヌの仕掛け弓（非常勤研究職員・本田優子）
- ・1998年度の主な動きとセンター刊行物のお知らせ

10号：1999年3月31日発行

- ・『久保寺逸彦文庫図書資料目録』の刊行について
- ・『バラートシ・バログ・ベネデクコレクション調査報告書』の刊行について
- ・千里の道を四歩半（非常勤研究職員・奥田統己）
- ・ハンノキ（研究職員・貝澤太一）
- ・問い合わせあれこれ（1）コノハズクとアオバズクのアイヌ語名について（研究職員・大谷洋一）
- ・歌い語りについて（研究職員・甲地利恵）
- ・刊行物のお知らせと平成10年度後半の主な動き

平成11年度前半の主な動き

（4月）

- ・佐藤知己非常勤研究職員就任

（5月）

- ・第1回センター運営協議会

- ・前・牧昭副所長転出、西澤勉副所長着任（7月）

- ・共同研究「第2次在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族的研究」（ロシア連邦共和国／参加：古原）

- ・アイヌ語指導者研修会（北海道ウタリ協会主催、札幌市定山溪／参加：澤井）

（8月）

- ・第一回薬用植物に関するワークショップ（薬用植物に関するワークショップ実行委員会主催、名寄市／参加：貝澤）

- ・日本言語学会夏季講座（神戸市／参加：澤井）

（9月）

- ・共同研究「近代日本の教育界におけるアイヌ認識の形態に関する基礎的調査研究」（つくば市／資料調査：小川）
- ・平成11年度東北・北海道身体障害者更生施設長並びに職員業務研修協議会（札幌市定山溪／講師：古原）

センター刊行物のお知らせ

今年度は以下の刊行物を予定しています。

- ・『ポン カンピソシ5 イノミ（祈る）』
- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第6号
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより』第12号
- ・『山田秀三文庫 文書資料目録Ⅰ』（仮題）

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金9:00～17:00 休館/土・日・祝